

国立寺泊療養所建設

# 埋蔵文化財発掘調査報告書

桐原石部神社御廟所

1980

新潟県教育委員会

國立寺泊療養所建設

# 埋蔵文化財発掘調査報告書

桐原石部神社御廟所

1980

新潟県教育委員会

## 序

本書は、国立寺泊療養所移転建設工事に伴い、昭和54年度に新潟県教育委員会が調査主体となって実施した、三島郡寺泊町下桐所在桐原石部神社御廟所の発掘調査の記録である。

本御廟所の調査では、主として江戸時代の遺構・遺物が検出され、当時代の精神文化の一様相が明らかになった。

近年、中・近世考古学研究の機運が高まりつつあるが、本調査の成果が今後の研究の一助となり、また延喜式内桐原石部神社はじめ古代史研究にも資するところがあれば幸である。

なお、多大の御協力・御援助を賜わった寺泊町・寺泊町教育委員会・桐原石部神社の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和 55 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 久間 健二

## 例　　言

1. 本報告書は、新潟県三島郡寺泊町大字下桐字五社 833 番甲所在の、樹原石部神社御廟所の発掘調査の記録である。
2. 本遺跡の発掘調査は、新潟県教育委員会が主体となり、昭和54年12月24日から同月28日まで実施した。
3. 発掘・整理等一連の作業は、新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。
4. 発掘調査に際して出土した遺物は、「五社山」と記入の上、一括して新潟県教育委員会が保存管理している。
5. 本報告書の執筆は分担執筆とし、各項文末に執筆者名を記した。編集は、調査担当者があたった。
6. 本調査に関連する資料を〔付編〕として掲載した。
7. 本報告書の作成に際し、下記の諸氏・機関から御指導・御助言・御協力を賜わった。  
(敬称略・五十音順)

竹内　武・新潟県総務部県史編さん室・新潟県立図書館・桃　裕行・  
山崎完一。

# 目 次

I 序 説	1
1. 調査に至る経緯	
2. 発掘調査の経過	
II 環 境	4
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
III 遺 構	8
1. 外部形態	
2. 層 序	
IV 遺 物	10
1. 繩文土器・石器	
2. 土 師 器	
3. 土師質土器	
4. 銚 貨	
5. 鎏 金 金 具	
6. 石 神 祇	
V 総 括	13
——下祠所在桐原石部神社御廟所の造営年代——	
(付 編) 『新潟県神社寺院仏堂明細帳』	17

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡周囲地形図	3
第2図 遺跡周辺の地形模式図と遺跡分布	5
第3図 遺跡周辺の地形図と城館跡・塚の分布	7
第4図 土地更正図	8
第5図 遺構平面図・土層図	9
第6図 石器実測図	10
第7図 基盤部地形図・遺物分布図	10
第8図 土器実測図	11
第9図 錢貨拓影図	12
第10図 鎏金工具実測図	13
第11図 桐原石部神社考古地図(1)	14
第12図 桐原石部神社考古地図(2)	15

## 図 版 目 次

図版I 遺跡遠景・遺跡近景
図版II 発掘調査前(1)・発掘調査後(1)
図版III 発掘調査前(2)・発掘調査後(2)
図版IV 発掘風景(1)・土層状態
図版V 発掘風景(2)・遺物出土状態
図版VI 遺物(1)
図版VII 遺物(2)・石祠

# I 序 説

## 1 調査に至る経緯

新潟県三島郡寺泊町金山に所在する国立寺泊療養所は、施設の老朽化にともない移転・新築することとなり、寺泊町長は同療養所長より昭和54年9月20日付けで用地の取得及び造成事業の開発計画に係る依頼を受け、用地として同町下桐字五社を選定した。

しかし、当該用地内には桐原石部神社御廟所があり、これが塚状を呈するところから、未周知ながら埋蔵文化財包蔵地ではないかとの推測が町教育委員会でなされた。9月27日、たまたま同町出張中の戸根与八郎学芸員は、町教育委員会吉井 功社会教育係長から、この件について現地確認の要請を受け、その取り扱いについて至急県教育委員会と協議するよう指導し、11月20日付けで寺泊町長より協議文の提出があった。

これを見て、部内において開発行為の可否について検討したところ、地域的な歴史性・周辺遺跡の調査状況から、当該地が延喜式内桐原石部神社跡である可能性が考えられるに至り、12月19日、県教育委員会は現地確認をおこない、町教育委員会との間で、本件については慎重に対処すべきことを確認した。

以上の経過をふまえ、まず確認調査を早急に実施し、その結果のいかんによっては開発行為自体に再協議を要する事態もありうることを前提として、12月21日、吉井社会教育係長の来庁を求めて確認調査の体制・日程等を協議した。協議の結果、昭和54年12月24日より12月27日の間、下記体制で調査を実施することとし、文化庁文化財保護部の承諾を得た。

(波田野至朗)

調査主体	新潟県教育委員会 (教育長 久間健二)	
管 理	総 括	南 義昌 (県教育庁文化行政課長)
	総括補佐	関 和彦 (県教育庁文化行政課長補佐)
	庶務管理	近藤信夫 (県教育庁文化行政課副参事)
	指 導	金子拓男 (県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)
	庶 務	獅子山隆 (県教育庁文化行政課主事)
	"	伊藤和子 ( )
調 査	調査担当	波田野至朗 (県教育庁文化行政課学芸員)
	調査員	稻岡嘉彰 (県教育庁文化行政課文化財主事)
	"	戸根与八郎 (県教育庁文化行政課学芸員)

調査調査員 藤巻正信 (県教育庁文化行政課学芸員)  
 " 齋藤基生 ( )  
 " 佐藤則之 ( )  
 " 高橋 保 ( )  
 " 折井 敦 ( )  
 " 北村 亮 (県教育庁文化行政課嘱託)  
 " 田辺早苗 ( )

協力 寺泊町教育委員会 (教育長 広田広四)  
 当銀敏雄 (公民館長)・吉井 功 (社会教育係長)  
 田中正明 (主任)・小湯 譲 (主事補)  
 寺泊町商工観光課 (課長 萩原一雄)  
 外山辰司 (観光係長)・山田昭夫 (企画開発係長)  
 桟沢 博 (主事補)・早川裕幸 (主事補)  
 桐原石部神社 (氏子總代 中島喜一郎)  
 大矢鶴夫 (下桐区長)・早川甚四郎 (神社世話役)  
 佐藤政市 (有志)・近藤貫次 (有志)

## 2. 発掘調査の経過

発掘調査は、御廟所を中心とし、東西・南北を軸として4分し、NE区・NW区・SE区・SW区とした。本件は時代等の確認を目的としたものであったが、調査の過程で古代まで溯古しないことが判明したため全面発掘に変更し、12月28日までを要した。

**12月24日（雪）** 現地着。調査員・町及び桐原石部神社関係者が参集して、御靈鎮めの祭礼を行う。平面図の作成・現状の写真撮影を経て、SE区より発掘を開始する。

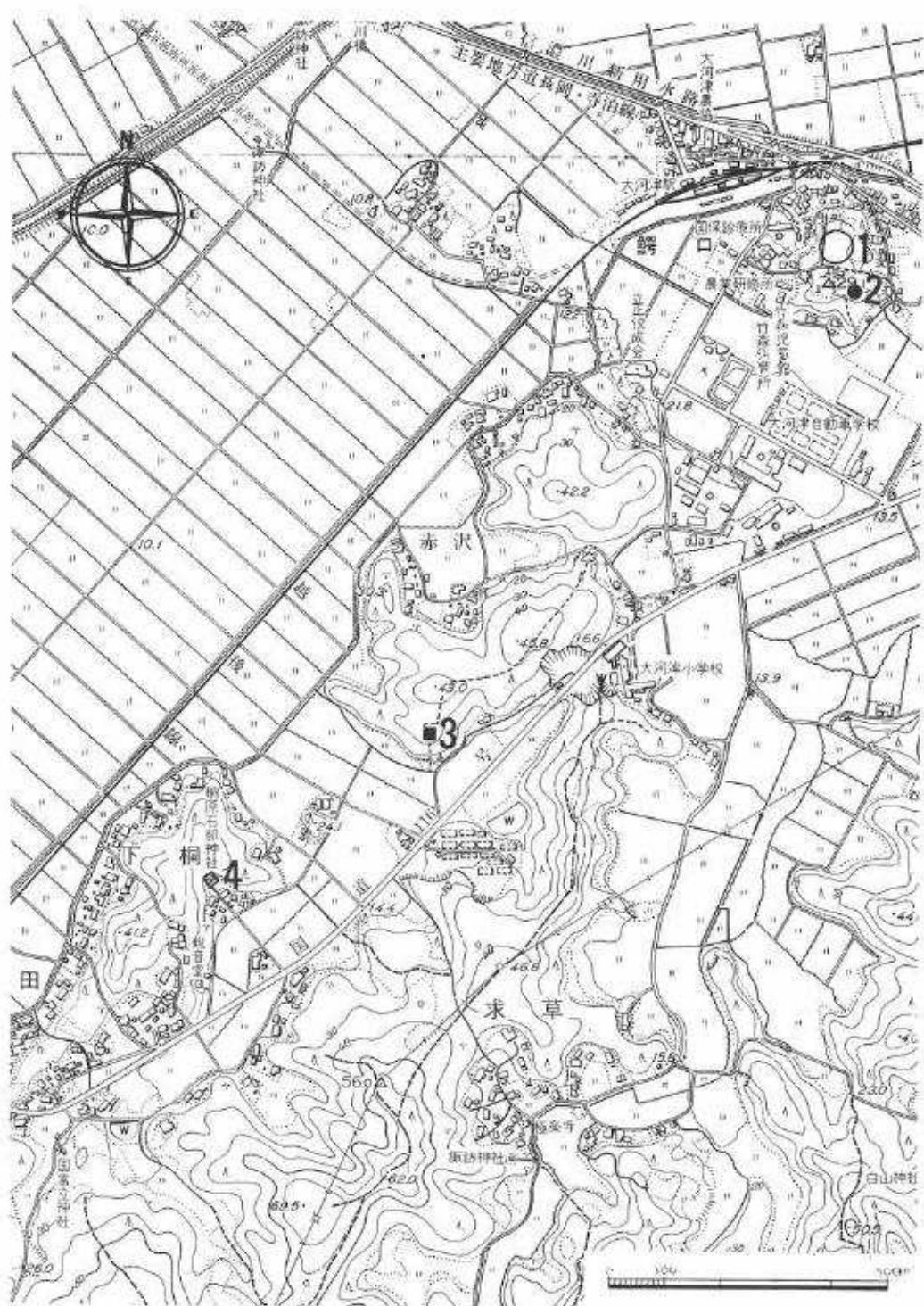
**12月25日（みぞれ）** SE区・SW区・NW区発掘。盛土中から、石祠屏片・寛永通宝出土。  
 寺泊町広田広四教育長・萩原一雄商工観光課長來訪

**12月26日（晴）** NE区・NW区・SW区発掘。盛土中から寛永通宝・文久永宝が、基盤層上から土師器片が出土。EWライン東半の土層図を作成。

**12月27日（雨）** NSライン・EWライン西半の土層図を作成。盛土中から縄文土器片・石器・寛永通宝・鍍金具片等が出土。

**12月28日（みぞれ）** 遺構基盤部を精査・平面図を作成し、現地調査を終了する。

(波田野至朗)



第1図 遺跡周囲地形図

- 1. 横滝山廃寺跡
- 2. 舞台塚
- 3. 下桐・桐原石部神社御廟所
- 4. 下桐・桐原石部神社

## II 環 境

### 1. 地理的環境

蒲原平野を緩やかに蛇行しながら北上する信濃川は、寺泊町大河津付近で本流と分かれ、分水流新信濃川となって日本海に注ぐ。この新信濃川と日本海に挟まれた地域が、室町時代以降に古志郡西古志とよばれた所の北半で、現在の三島郡寺泊町・和島村・西蒲原郡分水町の一部に該当する。この地域のはば中央を流れる島崎川の両側には、標高約80~90mの西山丘陵と曾地丘陵が併走している。西山丘陵はさらに北へ延びて国上山・弥彦山・角田山へ続き、曾地丘陵は次第に高度を下げながら大河津付近で蒲原平野に接している。

この周囲一帯は背斜構造によって構成されており、丘陵の連なりや河川の流れは南南西~北北東の方向を示している。これは石油構造ともいわれ、かつてこの近辺は尼瀬・西山の両油田に代表される油田地帯であり、日本有数の産油量を誇っていた。

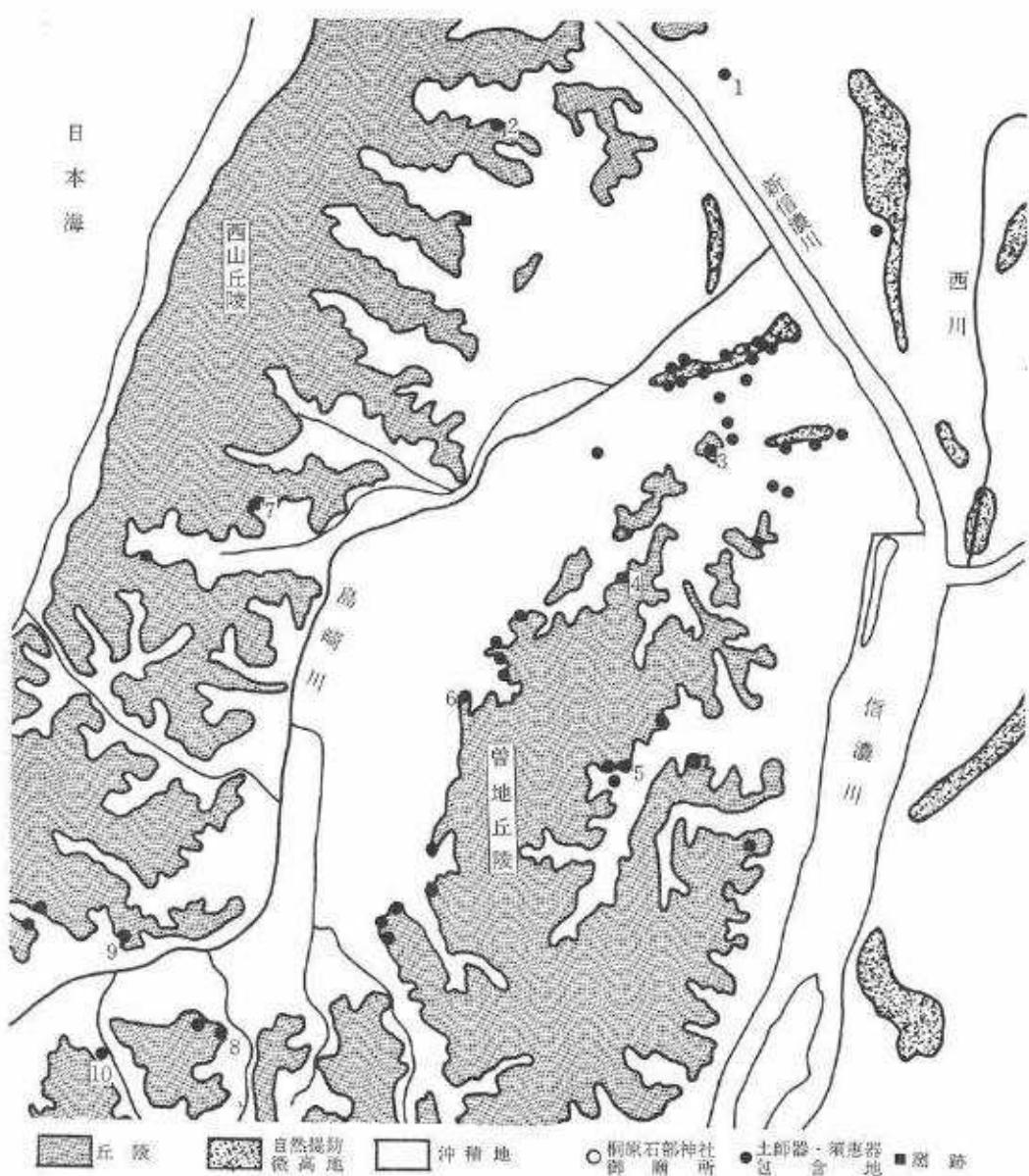
島崎川は出雲崎町田中に源を発し、寺泊町小豆曾根で新信濃川に注ぐ、延長18.3kmの河川である。この川はかつて西川に合流しており、夏戸から鶴口・竹森に至る下流地域は、常に湛水に悩まされたという。江戸時代までは下流域に円淨寺潟に代表される多くの潟湖が形成されており、現在小豆曾根などにみられる「潟端」という地名などから、当時の地形が想起される。集落は沖積地に接した島崎川及び支流谷口などの丘陵辺部に散在しており、中には寺泊町木島のような沖積地内の独立丘に寄るものもある。

本御廟所は、曾地丘陵が蒲原平野に突出した北端付近にあたり、それが北西から入る小谷によって分割状態に近くなった部分の南端に位置している。本地点は、南に向ってわずかに傾斜しているもののほとんど平坦であり、標高約30m・対沖積地高約20mを測る。周辺丘陵上は、杉・松等の造林地もあるが、ほとんどは雑木林である。本地点は造林地にあたる。

(北村 亮)

### 2. 歴史的環境

本御廟所周辺の丘陵や沖積地には、縄文時代以降の遺跡が数多く点在している。江戸時代の文化年間に橘 茂世が著した『北越奇談』の中にも、三島郡内の遺跡に関する記事がみえ、早くから当地域の遺跡が人々に知られていたことがわかる。第2図に示した遺跡は、おもに土師器・須恵器の包含地であるが、ほとんどは発掘等の詳細な調査は行なわれておらず、正確な時期を捉えることはできない。



地2図 遺跡周辺の地形模式図と遺跡分布

1. 竹が花遺跡
2. 弁才天窯跡
3. 横滝山廃寺 (1976年, 寺泊町教委発掘)
4. 松葉遺跡
5. 五千石溜遺跡
6. 五分一稻場遺跡 (1977年, 県教委発掘)
7. 夏戸窯跡
8. 北辰中学校遺跡
9. 長者原遺跡
10. 梅田遺跡

遺跡の分布は島崎川流域ことに右岸に顕著である(第2図)。その立地をみると、横滝山

周辺で一部沖積地に立地しているが、そのほとんどは標高10m前後の微高地や自然堤防上及び丘陵地が沖積平野と接する部分、特に西山・曾地両丘陵の小谷が島崎川の沖積地へ出る開口部の緩斜面に立地している。これは、生活の基盤であった農業生産活動の場となり得る、島崎川の沖積地及び後背の小谷と密接な関係があると思われる。

当地域は、律令時代において越後国古志郡の一部であったと推定されている。持統天皇3年(689)～6年(692)の間に「コシ」を越前・越中・越後の三越に分立し、その後大宝2年(702)に越中国4郡を併合している。<sup>(註1)</sup>この4郡とは、頸城・魚沼・古志・蒲原とするのが通説になっており、この時点では越後国の境域は後の出羽国を除けばほぼ定まったと考えられる。

越後国古志郡に関する記録のうち、桐原石部神社の名が初見されるものとして『延喜式』があげられる。これには、北陸道の大家・伊神・渡戸の3駅及び三宅神社・桐原石部神社・都野神社・小丹生神社・宇奈具志神社の五社六座が記されている。大家駅は『倭名類聚抄』に見られる大家郷と同所と思われ現在の出雲崎に、伊神駅は寺泊に比定されている。また、都野神社は与板(伝大家郷吉川庄)に、小丹生神社は和島村島崎に、宇奈具志神社は和島村乙茂にそれぞれ比定されている。しかし、桐原石部神社については現在寺泊町下桐と和島村上桐に存在しており、両者のいずれかもしくは全く別の地であったのか結論は出ていない。いずれにせよ、古志郡中の式内五社六座のうち4つまでが島崎川流域にあることや、須恵器を出土する遺跡が古志郡中の他地域と比べて圧倒的に多いこと(金子拓男 1976)、横滝山に瓦葺きの建物の存在が考えられること(寺村光晴 1977)などから、当地域が古志郡の中心的地域であった可能性が考えられる。

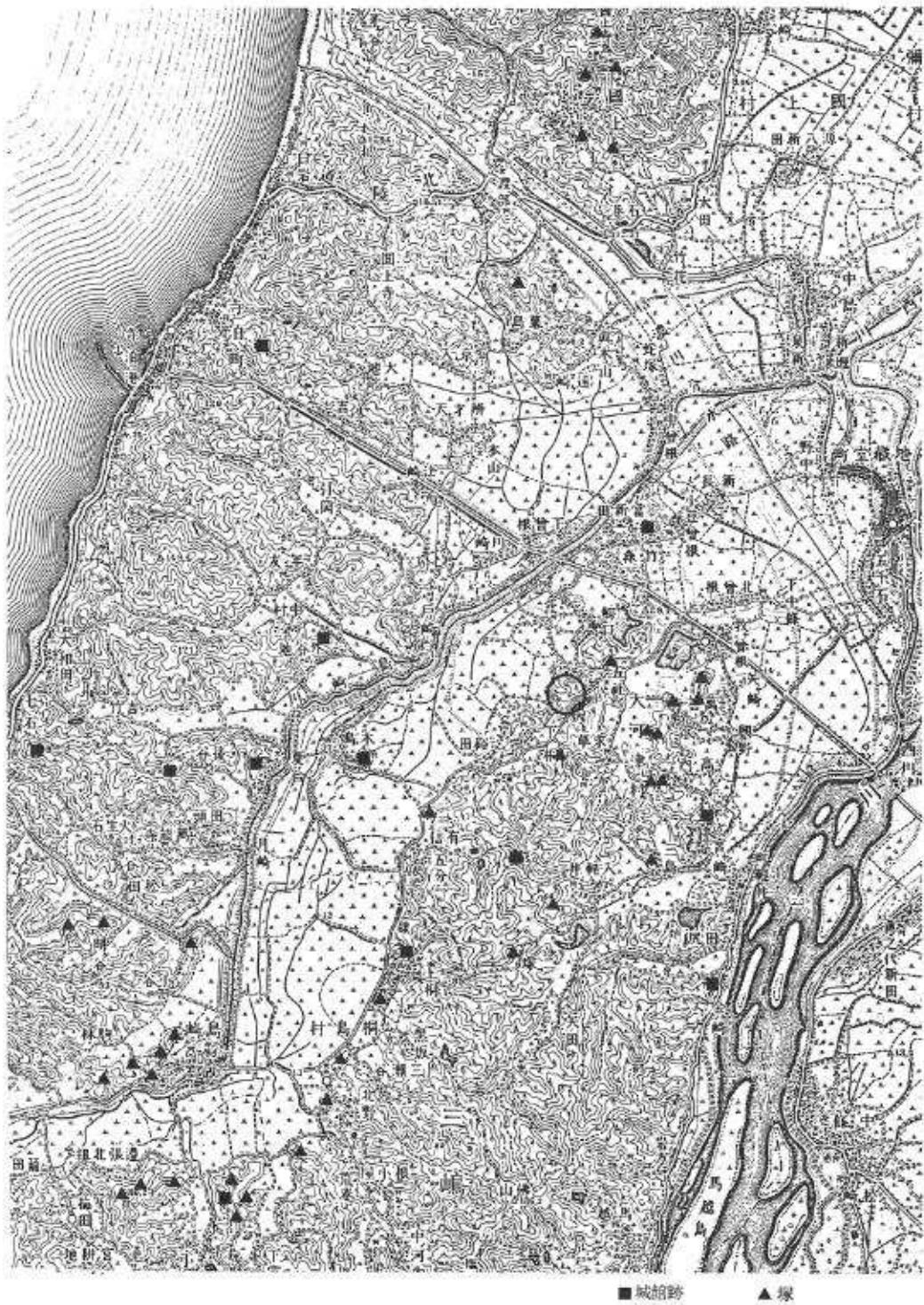
第3図は新信濃川開削前の明治44年測量の地図に、中世城館跡と塚の分布を併示したものである。城館跡はほとんどが室町時代のものと思われるが、同一時期に存在したわけではない。これを見るとその立地は、一部を除いて集落裏手の丘陵先端部もしくは沖積平野中の自然堤防上であり、水田経営も含めた領地支配とも無関係ではなかったと考えられる。

交通についてみると、『延喜式』における北陸本道は越前・加賀・越中・越後の国府通り、寺泊を経て佐渡に至っている。寺泊町渡部にその位置が比定されている渡戸駅<sup>(註2)</sup>には、船2隻のみが置かれているが、『延喜式』にみえる船のみの駅(水駅)はここだけであって、佐渡へ渡る駅とも考えられている。その後、江戸時代までに寺泊から弥彦・福島・赤塚を経て新潟まで北陸道の延長がなされているが、当地内における北陸道は、第2図の遺跡分布及び第3図の城館・塚の分布から、古代からほとんど変わることなく曾地丘陵の西側を通っていたと考えてさしつかえないであろう。

(北村亮)

註1 『続日本紀』 文武天皇大宝二年三月十七日条

註2 『延喜式』 卷二十八



**第3図 遺跡周辺の地形図と城館跡・塚の分布**  
(国土地理院「三様」1:50,000原図 大正3年発行)

### III 遺構

#### 1. 外部形態

御廟所の外部形態は、長方形の壇状部と、そのほぼ中央に位置する円形の小丘部からなっていた。壇状部は、東西6・7m・南北8.0m・周囲との最大比高差（東側）0.55m・最小比高差（西側）0.2mを測り、小丘部は、直徑2.5m・壇状部との比高差0.5mを測った。

御廟所の中軸は、東西南北の各方位に合致し、南面して参道があり、かなり意図的に設けられたものであることが知られる。また、領域の南辺と西辺は道によって規制され、東辺は畠地によって画され、これは第4図の示すとおりであるが、壇状部北辺は領域の北辺とは一致せず領域の中程にある。領域はすなわち神域であるが、壇状部と、領域北半の低部が、それぞれいかなる役割をもつものか、伝承等は遺存していない。

小丘部の上には石祠（図版Ⅷ-8）が奉載されており、御廟所の主体部と考えられる。

（波田野至朗）

#### 2. 層序

確認できた土層は19層であったが、非常に近似するものを除くと12層となる。

（第5図）これらの土は、大別して黒色土系と黄色土系に分けることができ、2系統の土が交互に堆



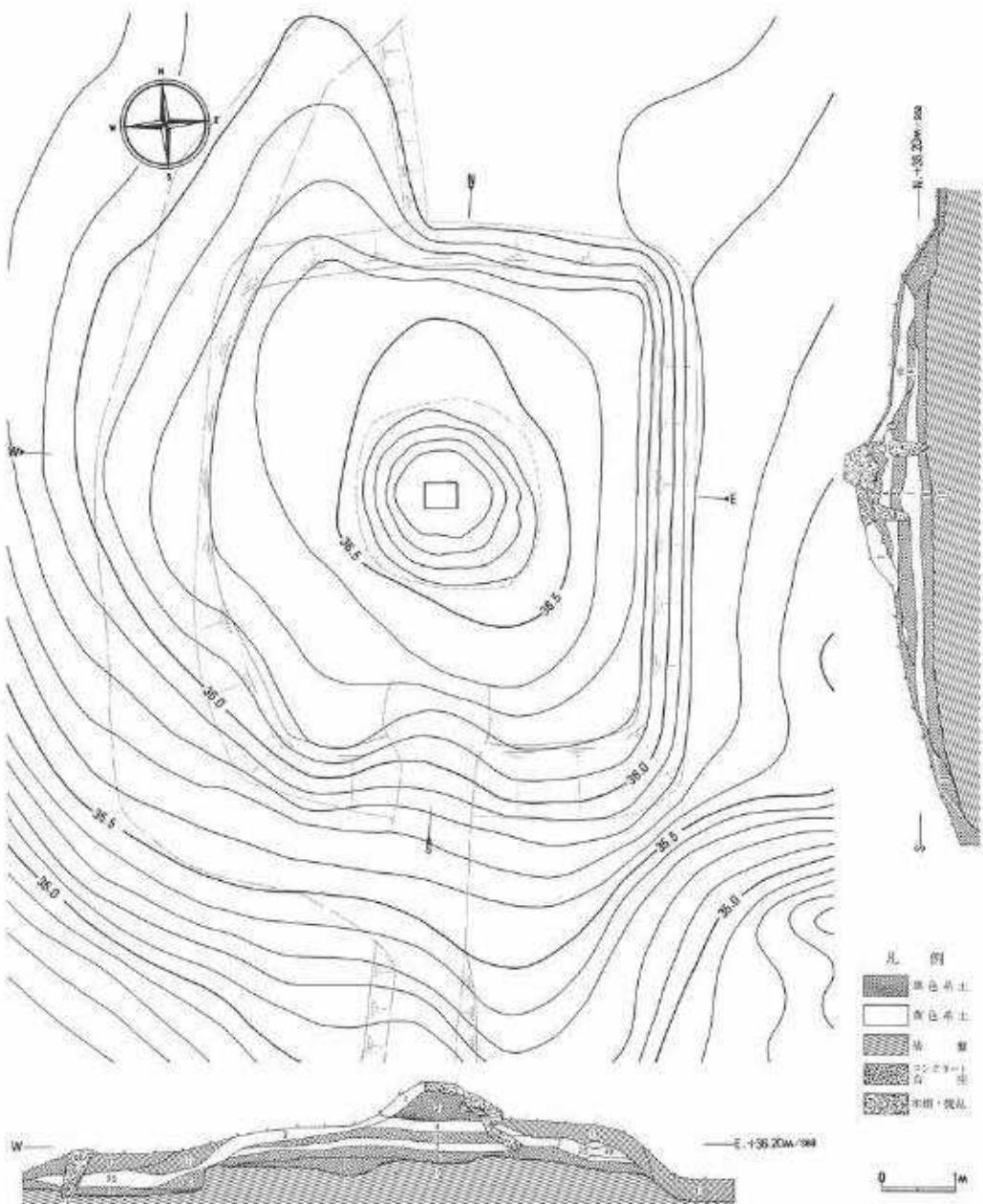
第4図 土地更正図（明治44年調整図より作成）

積していることが観察できる。これらのうち、8・8B・10の各層は御廟所形成以前の自然堆積土、9層は形成直後の自然堆積土、3B・8C・11B・12の各層は盛土崩壊土、無番号層は現表土であり、それ以外が残存する盛土である。

盛土は、壇状部と小丘部との間に切れ目なく盛られており、一連の作業として壇状部と小丘部とが同時に形成されたことがわかる。ただし1層は、現表土上に盛られており、他の

黄色系土とは全く異なる明るい色調・軟粘性を呈するところから、近年盛られたものと推定される。恐らく、樹木の成長とともに傾いた石祠を支えるためと、小丘部の補修を目的としたものであろう。

(波田野至朗)



第5図 遺構平面図・土層図

## IV 遺 物

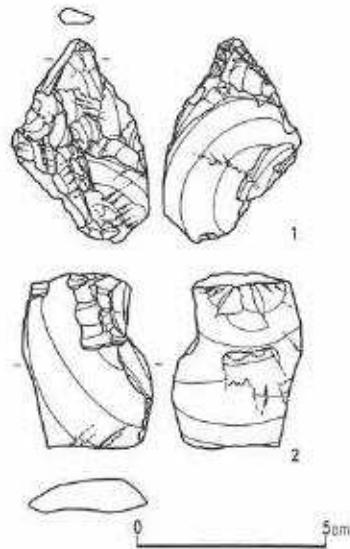
### 1. 縄文土器・石器

**縄文土器** 胴部の細片で、赤褐色を呈する。器面が磨滅しているため、中一後期ごろの所産ではないかと推定される以外、詳細は不明である。

**石錐** (第6図-1・図版VI-1) 横長の剥片を素材としている。正面は先端部にごく僅かの調整痕を認めるのみで、裏面からの調整が主である。先端部の横断面が扁平なため、石錐としての鋭さを欠く。

**剥片** (第6図-2・図版VI-2) 打角115度を測る縦長剥片で、末端は折損している。使用痕は認められない。

(齊藤基生)

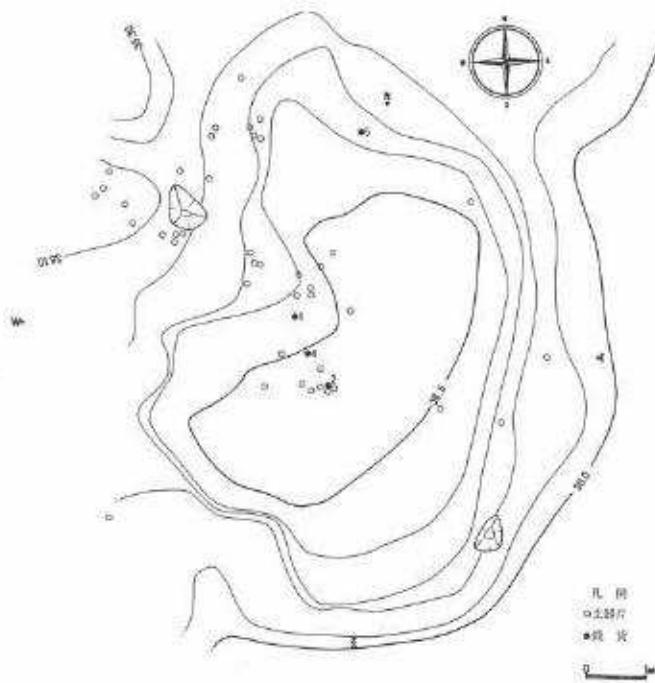


第6図 石器実測図

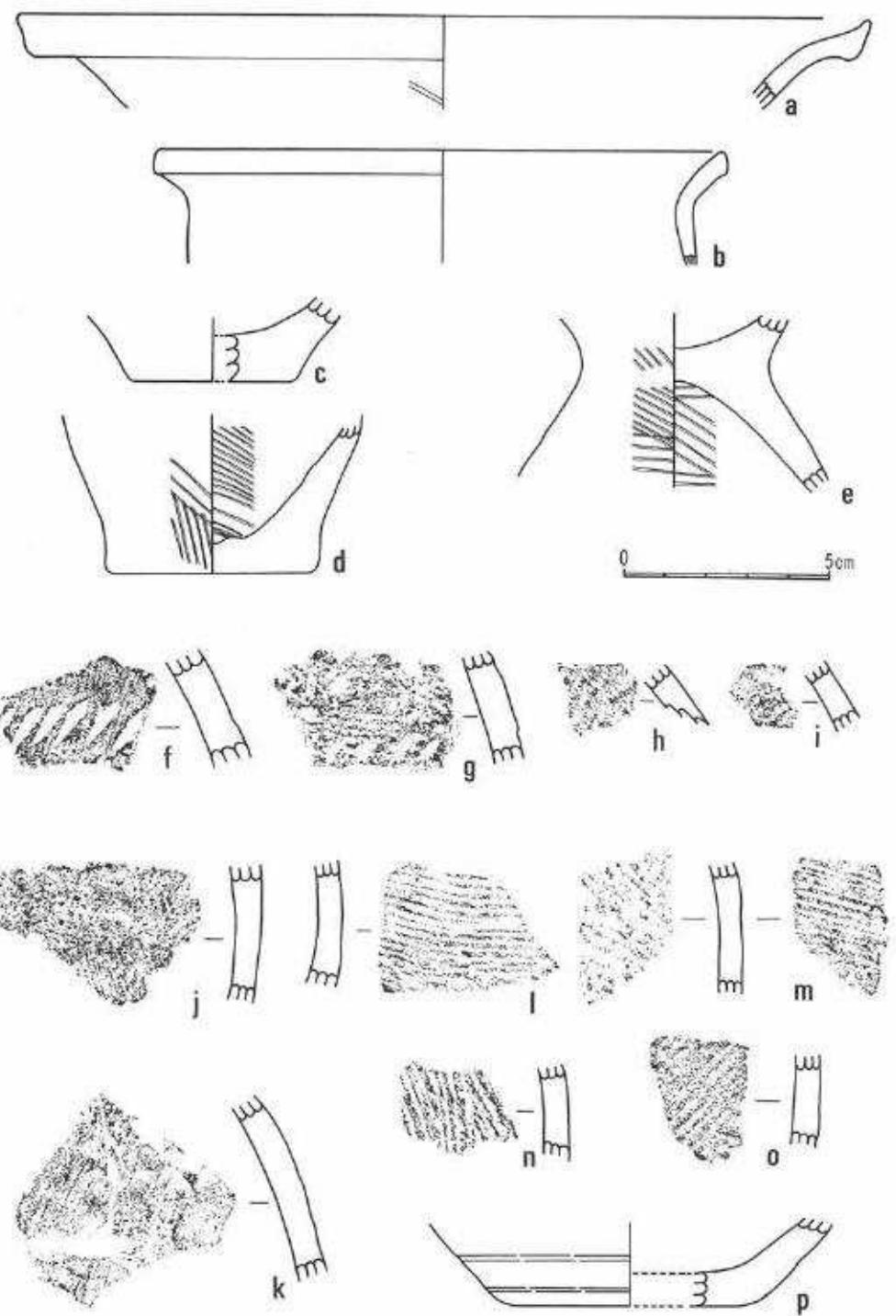
### 2. 土師器 (第8図-a~c・ 図版VI-3~16)

何れも盛土下の8~8B層からの出土。細片であるため器形の知りうるものは数点しかない。胎土は全般に粗く、砂・砂礫を混入している。

a は推定口径20.5cmの甌で、口縁端部が面をもち、頭部外面には刷毛目の整形痕があり、頭部から胴部にかけては炭化物の付着が認められる。b は推定口径13.5cmの甌口縁部で、端部に面をもつ。c は底径4cmの底部片で、縦なれ痕が認

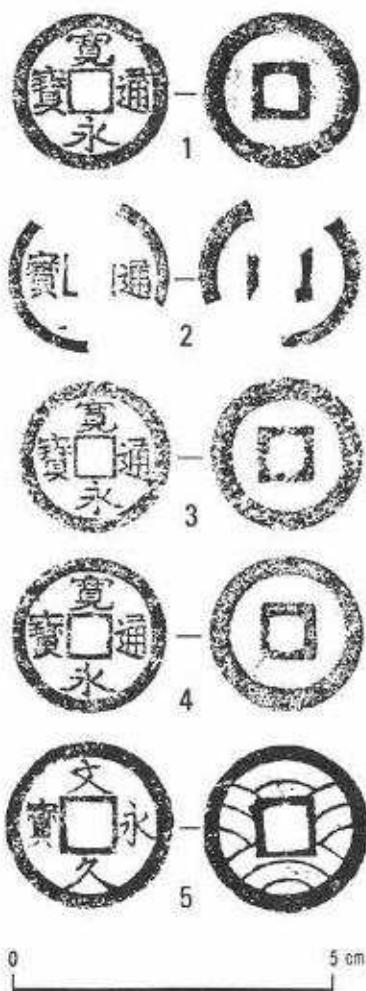


第7図 基盤部地形図・遺物分布図



第8図 土器実測図

められる。d はやはり底径 5 cm の底部片で、内外両面に刷毛目整形痕があり、内面は黒色を呈する。e は高杯脚部片と思われ、内外両面に比較的荒い刷毛目整形痕がある。f と g の外面上には、刷毛による整形の後に斜行刻み目を施している。h と i は、外面が黒褐色を呈し、LR 繩文が施されている。同一個体片と思われる。j ~ l は、外面に炭化物が付着していることから、甕の胴部破片の可能性があり、o もこれに近似している。何れの外面または両面にも刷毛目整形痕が認められる。



第9図 錢貨拓影図

出土の土器片には弥生終末期的なものもあるが、全般的に石川でいう月影II式に相当する古式土師器と考えられる。

(田辺早苗)

### 3. 土師質土器 (第8図-P・図版VI-17)

底径 6 cm の杯底部である。内外両面に横なで整形痕が認められ、硬質である。中世の所産であろう。

(田辺早苗)

### 4. 錢 貨 (第9図・図版VII-1~5)

盛土 5・7 層から寛永通宝 4 枚が、盛土崩壊土の 5B 層上面から文久永宝 1 枚が出土している。

1 は寛永 14 年 (1637) 鋳造の仙台銭、2 は同年鋳造の岡山銭、3 は寛永 16 年 (1639) の井之宮銭、4 は明暦 2 年 (1656) の沓谷銭と推定され、何れも江戸時代前期に鋳造された古寛永通宝に属する 1 文通銭である。

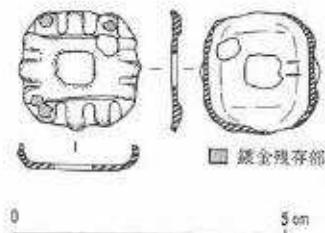
5 の文久永宝は、文久 3 年 (1863) に江戸浅草銭座または江戸東大工町銭座で鋳造された江戸時代後期の 4 文通銭である。

(波田野至朗)

### 6. 鎏金金具 (第10図・図版VII-6)

2層より出土。現状は隅丸方形であるが、欠損しているため全容は知り得ない。中央に孔があり、縁辺部に舌状の打ち出しがある。銅製で鍍金されており、祭祀用具片と思われる。

(波田野至朗)



第10図 鎔金金具実測図

### 7. 石祠 (図版VIII-8)

小丘部上に奉載されていたもので、本調査に先立ち御廟所参道の中程に移設されている。凝灰岩製で、高さ24.0cm・間口24.0cm・奥行10.8cmを測り、基壇・室・屋根の3つの部分から成っている。基壇には、正面に階段を・縁の回りに高欄を作り出している。室は正面及び両側面を開き、正面には両開の扉が付き、柱・梁が彫出されている。なお、扉の一方は、盛土の2層上面から出土している(図版VIII-7)。屋根は基本的に入母屋造りであるが、屋根正面の流れの上面に、切妻のいわゆる千鳥破風を、また正面及び両側面は軒唐破風で飾っている。造りは總じて精巧で、基壇の一部が割れているものの風化も少なく、遺存度は良い。

(北村亮)

## V 総括

### ——下桐所在桐原石部神社御廟所の造営年代——

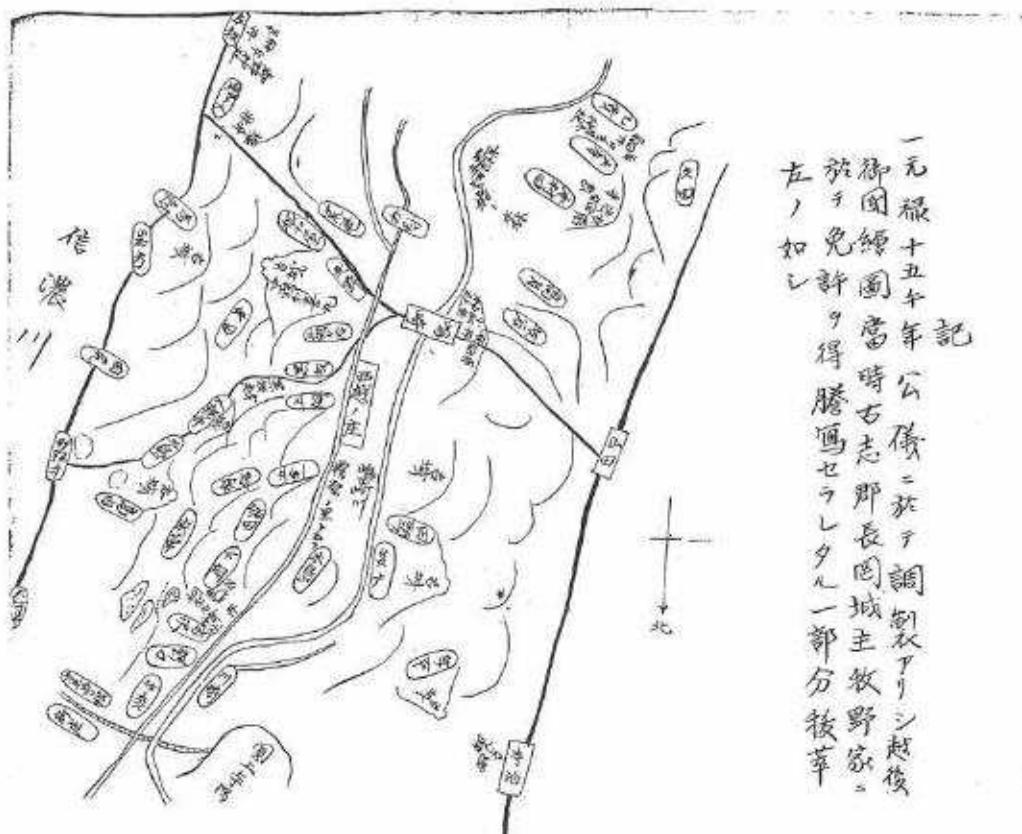
本御廟所の構造は、発掘調査によって知られた限りでは、方形壇状の平坦地を盛土と周辺の削り出しによって構築し、その一連の作業として中央に小丘部築き、小丘部上に石祠を奉載し、石祠の背後に松樹を伴なうことによって構成されていた。方形壇状部の各辺には櫛がめぐっておりこれが磐境・小丘部及び石祠が神籬・松樹が憑代にそれぞれ該当するものであろう。本御廟所の形状が造営当初から現状のようであったかは、発掘調査からは不詳であるが、東側の開墾による整形や、西側の堆積土は、削土による御廟所の形状の変容を推測させる。ちなみに日野資徳氏は、本御廟所の旧状が「周圍式拾間餘ノ大塚ニテ老松老桜繁茂」しており「御キヤウ塚」と呼称されていたが、「明治八年周圍開墾ノ際採木シ塚上ヲナラス」ことによって変形したことを記録している〔註1〕。

調査結果と日野資徳氏の記録とを照合すると、遺構は削土後新に築かれたものではなく当初の「御キヤウ塚」の意図的な残存部であるとすることができよう。

本御廟所の造営は、下層盛土である5層及び7層からの寛永通宝の出土により、上限が最も新しい鋳造年である明暦2年（1656年）であり、下限が新寛永通宝の大規模な流通を考慮するとその鋳造開始の寛文8年（1668年）以前であった可能性がある。文久永宝の出土は、表土に近接した崩壊土5B層上面からであり、下限の比定資料とはしにくい。

文献資料については、宝暦9年（1759年）に当該地に「大塚」が存在していたというものがあるようであるが〔註2〕。原資料が不明であり確認できない。また慶長2年の「西古志郡下桐原村御検地帳」・慶長3年の「山東郡西古志郡之荘ノ内下桐村御検地帳」〔註3〕における村名の変遷や、神社・御廟所の状態等についても、同検地帳が調査しえない状態にあるため確認できない。また、元禄15年（1702年）に製作したとされる古地図（第11・12図）には、「延喜式内」・「御廟所」等がみえるが、字名・方位等から明治10年代末の地租改正時に作成された可能性が大きく〔註4〕、本地図の内容はそのまま採用できない〔註5〕。

石祠は、その製作が江戸時代中期以前には遡りえず〔註6〕。明治16年（1883）に提出された『神社明細帳』に記載されているものの規模よりかなり小さい〔註7〕。神社関係者の口碑



第11図 桐原石部神社藏古地図(1)

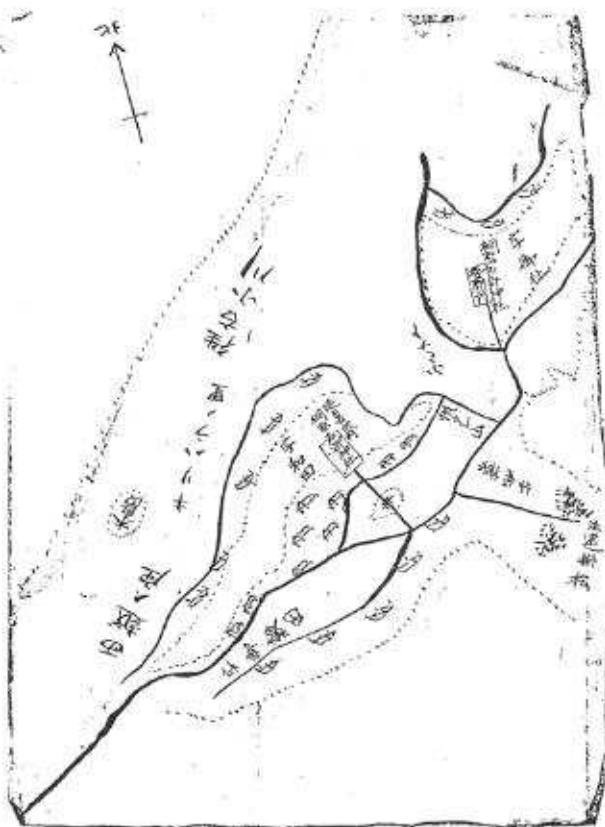
では、明治16年当時「木祠」であったものを意図的に「石祠」と届出、大正末年ごろ腐朽により現石祠に取り替えたという〔註8〕。

以上によれば、御廟所の造営年代を推定する根拠となるものは考古資料のみといふのが現状である。本地における御廟所の形成に、土師器や中世土師質土器等の出土もあるので、さらに溯古する可能性は残るが、現廟所の造営は江戸時代前期後半・1660年頃を上限になされたもので、直接延喜式内社の遺構と結びつくものではないと考えられる。「御キヨウ塚」が現御廟所と一致するものであるか否かは推測の域を出るものではないが、現在形・記録・周辺の塚の分布から同一のものとみられる。

また、塚上に当初から祠があったか否かは確証がない。樹齢60余年の松樹についても、植樹した桜が自生した松に淘汰されたためこれを神木とした〔註9〕もので、削土されたこともあるが、当初からの憑代の存在は不詳であり、当時の祭祀形態は知り難い。

桐原石部神社の成立は、この社名が『延喜式』にみられるところから、10世紀前半以前に溯古することは確実である。本地域はII章で触れたように、当時古志郡のうちと考えられ、島崎川下流域一帯を「キリハラノ里」と呼んでいるところから、式内社はこの一帯に存在していたものとみることができる。現在この地で桐原石部神社と称する社は、ここ寺泊町下桐と、隣接する和島村上桐にあり、いずれが「延喜式内社」であるかをめぐって論争が続いた。『神社明細帳』の記載内容〔註10〕や、このたび調査した御廟所の改造・山陵祭〔註11〕などは、当時の共同体の事情を背景としたものではあるまい。

ともかく、延喜式内桐原石部神社比定地問題は、越後國の成立・北越開発と駅制・横滝山廃寺などを含む総合的な見地からの検討が、今後も続けられることが望まれる。



第12図 桐原石部神社考古地図(2)

(波田野至朗)

- 註1・2・3 『桐原石部神社御由緒書逐條按文』（新潟県立図書館蔵）
- 註4 昭和56年2月19日、阿部洋輔氏御教示。
- 註5 牧野家原図は現在発見されておらず、比較できない。
- 註6 昭和55年1月14日、山崎完一氏御教示。
- 註7 「一、石祠 間口貳尺三寸三分、奥行貳尺三寸」、史料現称『新潟県神社寺院  
仏堂明細帳』（新潟県絶務部県史編さん室蔵）
- 註8・9 昭和55年12月15日、早川基四郎氏御教示。
- 註10 両社提出の『神社明細帳』には、ともに「延喜式神明帳ニ記載ノ當社タル旨」  
等と朱書き加筆され、届出時の「式内」の二字は削除されている。当時の新潟県社  
寺様は、両社双方について式内社比定を避けている。
- 註11 「五月十五日 山陵祭 五社御稲ニ於テ大正十二年ヨリ祭典ヲ執行ス」・『祭  
典ニ關スル書類』（村社桐原石部神社社務所蔵）

#### 〔参考引用文献目録〕

- ア 青柳清作 1979 『寺泊の歴史』
- オ 岡本郁栄・金子拓男・家田順一郎・高橋陽子 1977 『寺泊・出雲崎』新潟県文  
化財調査年報第16 (新潟県教育委員会)
- カ 風間正太郎 1924 『桐原石部神社並神陵考』  
金子拓男・駒形敏朗 1976 『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(蛇  
山遺跡)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第6 (新潟県教育委員会)
- サ 斎藤彦太郎 1924 『桐原御神陵誌』(靈蹟古墳保衛會事務支所)
- テ 寺村光晴・久我 勇 1960 『寺泊のおいたち』 (寺泊町教育委員会)  
寺村光晴・岩本圭輔・吉井 功・安藤文一・石井克己・一山 典・斎藤彦太郎・佐  
々木和博・波田野至朗 1977 『横流山廃寺跡発掘調査概報(昭和51年度調査)』  
(寺泊町教育委員会)
- ト 戸根与八郎・千葉英一・家田順一郎 1978 『国道116号線埋蔵文化財発掘調査  
報告書(五分一稻場遺跡)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第14 (新潟県教育委  
員会)
- フ 藤岡謙二郎 編 1975 『日本歴史地理総説 古代編』 (吉川弘文館)

〔付

編〕

『新潟県神社寺院仏堂明細帳』

(部

分)

寺泊町下桐所在 桐原石部神社御廟所明細帳

〔古語〕

『新潟県神社寺院仏堂明細帳』部分

一、本福では「新潟県神社寺院仏堂明細帳」(以下「明細帳」)のうち、本報告書に直接関係した寺泊町下桐所在の相原石部神社二社分と、和島村上桐所在の桐原石部神社分、計三社分を掲載した。

一、「明細帳」の記事等には、届出時の原文に加筆されている。

- (二) 在社の「祭神」の項までの「文」のみ「朱書」である。  
行書体等の欄中・欄外の記事及び抹消線は「朱書・朱線」  
で、一部「墨書」を混じえる。須田氏認印とともに、当時の  
新潟県社寺掛での加筆・押印と思われる。

一、「明細帳」は現在、新潟県総務部県史編さん室の所蔵となつてゐる。

\*二〇一八年十一月現在、新潟県総務監理部 法務文書課の所蔵となっている(二〇一九年八月補記)。

寺泊町下桐所在 桐原石部神社明細帳 (一)

新潟縣守下越後國三島郡下桐村字加田  
明治二年三月廿六日立

村社

○桐原石部神社

武子攝代  
桑原佐  
中島喜  
近藤晋

祠事

田中聖徳主

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

役

新嘉坡舊居  
越後國二島郡上板村字樂合  
丁巳年夏月

上本村字樂々子ノ木

1548

一祭神不詳

藏山天子奇方合

1549

（續）

古文

創立年月不詳。新嘉坡四大區之一。

一御社ト半シ給<sup>ム</sup>同官三鳥爵<sup>モ</sup>東方村廣川

九郎古衛國外祠堂大人十月初五午肯御社  
上酒成十四年七月廿七日付社二月二

體<sup>ク</sup>身<sup>シ</sup>土<sup>ト</sup>中<sup>ウ</sup>故<sup>コト</sup>蒙<sup>モル</sup>明<sup>ミハ</sup>二<sup>ニ</sup>首<sup>ヒ</sup>高<sup>タカ</sup>一<sup>イ</sup>職<sup>シテ</sup>ノ<sup>ノ</sup>時<sup>ヒ</sup>上<sup>アマ</sup>相<sup>シ</sup>才<sup>シ</sup>知<sup>ス</sup>八<sup>ハチ</sup>本<sup>ボン</sup>即<sup>シテ</sup>祠<sup>シテ</sup>堂<sup>ドウ</sup>一<sup>イ</sup>職<sup>シテ</sup>ノ<sup>ノ</sup>始<sup>ヒ</sup>

○我族國式神社  
神社事内云  
神社事内云  
神社事内云  
神社事内云

村社頭子一戸、而彦子居宅北、有リ里民云古八神  
御五百万有リト鳥居八村下拾四五石ノ煙子有リ

西ノ島居八鷗崎村一域ニ有リトハ今ハ西方共ニ  
名前、魚村、美濃村等の名を有す。土有地主は伊藤、

丙子年正月廿九日  
於南社上口  
丙子年正月廿九日  
於南社上口

村社

○桐原万郭神社

○古老ノマ牌ニ云古ハ春秋ニ季ニ官祭アリ春ノ 祭日ハ三月十五日 <small>祭事ノ日也</small>

1550

根ニ立有伐世年春缺乃傍力伎不有半拿夜室屋乃 神門鳥網張乃揭之缺之有伐志自生瑞山銀環节
四美立承吉幸幸持豆人美南万安前岐万鳥派乎 酒澤乃翁命方恩金恩守署豆并群馬川振起立
御門乃蒼草木平仰枝技良比拂淨且安氣每 登者金刀吉支取豆石乃美設新袁万工曾例乃手人
二意寶世乍加哆羅二酒澤呈子夏季間之事方故 滿刀瓶方更良滿並乍大前二麻附之立神酒乎
頂二伊南多枳持豆夏保拂比壽奴疏闇三東分 於異由留在石手三雷音刀聲龙右天世三南里刀土

1551

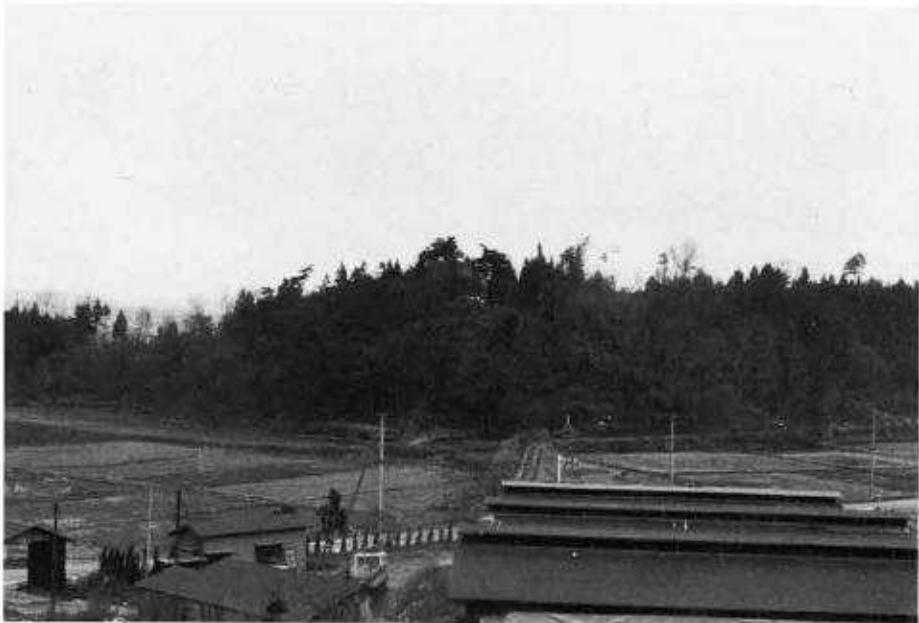
于考奉ル三番三鬼ニシテ神靈五所ノアリシコトハ 疑ニテ容レザエヌナリ	アリ其神社吾我八星故戸ノ神ナリ我祀廢 絶シテ久ケドモ詳ニ興サムト欲乞モナシ莫聽
○金地頬一面	流行ル所以ナ今速義セラシ興スヘン然ニモナ
表三桐原靈神ト聖ニ重ニ安西四己年神靈往日 位下麻原居提書トアリニ當國於大國主御蘇伊守 蘇原信親歐幕府老中 在第中等階ナシ	疫魔猶益流行シテ村長以下悉クセナシト給 「川島等以村民等太懼レ相謀ニ建ニ所ナリ」
モーナリ	本社 神官
○万碑 一基	祠堂 手島郡上桐村 祭音平太郎
文久二年戊夏後五位下芳林守源朝臣 太清跋ノ筆ナリ	氏子 田代太輔小屋市農七手希中戸 一等耕庭追面離合城里二十町石五間

1852

二社殿開敷	古之通相達無之候也 明治十六年六月	以 上
本社 廣野四又 辨殿 開口壹 鳥居松開九尺 中殿 開口壹 本社 神官	氏子 田代太輔小屋市農七手希中戸 祠堂 手島郡上桐村 祭音平太郎	
境内坪數并地種 手島郡上桐村 中村治平 小黑平 大	一等耕庭追面離合城里二十町石五間	
手島郡上桐村 中村治平 小黑平 大		
新鴻壽令永盛輝殿		

1853

図版 I



遺跡遠景（手前の山頂部が遺跡） S→N



遺跡近景（樹木が密生していた） SE→NW

図版 II



発掘調査前(1) (方形壙状を呈している。) N→S



発掘調査後(1) (不定形な地山面) N→S

図版 III



発掘調査前(2)

E→W



発掘調査後(2)

E→W

図版 IV



発掘風景(I) (白線部がN-Sライン) NE→SW



土層状態 (S-Nライン) E→W

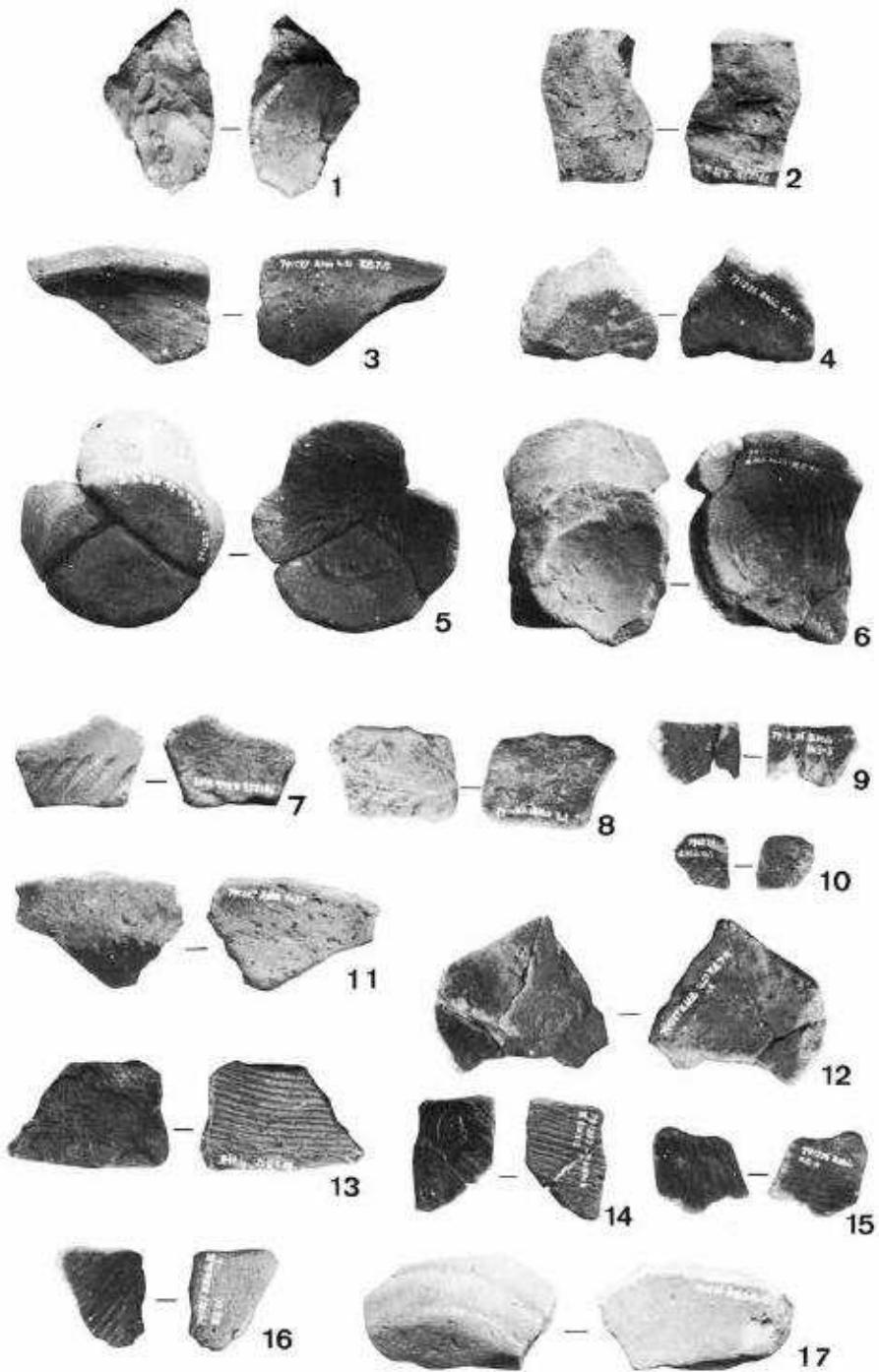


発掘風景(2)（竹橋は、8層出土の土師器） N→S



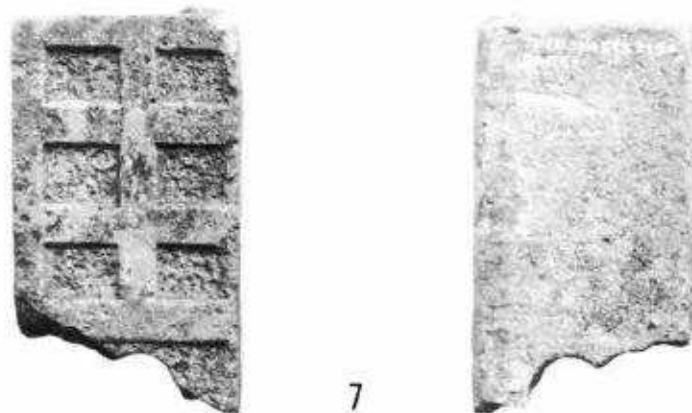
遺物出土状態（NW区 7層上面より寛永通宝が出土） N→S

図版 VI



遺物(1) (縮尺  $\frac{1}{2}$ )

図版 VII



遺物(2) (縮尺  $\frac{1}{2}$ )・石祠

新潟県埋蔵文化財調査報告書第23

國立寺泊療養所建設

## 埋蔵文化財発掘調査報告書

桐原石部神社御廟所

昭和55年3月25日 印刷

昭和55年3月31日 発行

発行 新潟県教育委員会  
印刷 長谷川印刷

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第23 正誤表

新潟県教育委員会

P・L.	誤	正
P.4 L.4	挟	挟
P.6 L.7	している。〔註1〕	している〔註1〕。
P.10 L.14	2.土師器	2.弥生土器・土師器
P.12 L.8	石川でいう	石川県でいう
P.12 L.8	月影II式	月影式
P.15 L.23	や・このたび	や、このたび